平成23年度（2011年度）

国際教育
地球市民を地域とともに育てよう Part 10
報　告　書

公益財団法人　滋賀県国際協会

は　じ　め　に

2011年3月11日から、1年が経ちました。
昨年度発行した教材「『言葉がわからない』体験ゲーム　何が起こった？（震災編）」は、いつ起こるかもしれない災害に備えて、要援護者となり得る外国の方たちへの対応を含めた地域での防災意識の向上をねらいとして開発に取り組んだのですが、まさか完成からわずか1カ月ほどで未曾有の大災害が起こるとは想像もしていませんでした。

今回の被災地の一つである国際交流協会の方から当時の様子を伺ったところ、被災された外国の方の中でもっとも辛い経験をされた中に、日本語学校へ通っていた生徒たちが挙げられるのではないかということでした。地域に日本人の知り合いも少なく、日本語での情報が助けにならなかったためです。日頃、気軽に立ち寄っていたコンビニエンスストアでさえも、長い行列ができ、「お一人様　15分　5品まで　ご協力お願いします」といった張り紙が、より一層入店への敷居を高くしたようです。幸い、なんとか避難所で食料などの配給を受けられたようですが、その当時の不安はどれほどのものだったかと察します。

今回の震災では、在住外国人の方たちも日本のために貢献したいとの思いから、救援物資を届けられたり、民族料理の炊き出しをされたりする方々が大勢おられました。その様子は、一部報道でも取り上げられ、これまで「助けてあげなくてはならない外国人」というイメージが取りざたされることが多いように感じていましたが、テレビのニュースに映し出された支援活動に取り組む彼らの姿はとてもたくましく、「共に暮らす住民」としての印象を残してくれたように思います。

また、海外からは163カ国・地域及び43国際機関から支援の申し出があったことは、日本に暮らす者として心から感謝すると同時に、多くの途上国の人々からも大きな支援を受けたことを真摯に受け止め、今なお世界が抱える様々な課題の解決に向けて、これから日本がどのような立場をとり、どのような行動を示すべきなのかを考えていく必要があるのではないかと思います。

みなさんの人生観に大きな変化をもたらした2011年。
今年度に行った国際教育に関連する事業や資料をまとめました。みなさまの参考になれば、幸いです。

平成24年（2012年）3月
公益財団法人滋賀県国際協会

目　　次

◇　はじめに ……1
◇　目　　次 ……2

実績報告

◇　**国際教育ワークショップ** ……3
地球市民を地域とともに育てよう　Part 10
「ワークショップを使って　もっと楽しく、もっと深〜い“国際教育”を
やってみよう〜異文化理解・多文化共生を題材に〜」
講　師　　木下　理仁　さん
かながわ開発教育センター（K-DEC）理事・事務局長
逗子市　市民協働コーディネーター
東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター　国際理解教育専門員
開催日　　平成24年（2012年）1月14日（土）　　会場　ピアザ淡海207会議室
主　催　　公益財団法人滋賀県国際協会
共　催　　独立行政法人国際協力機構大阪国際センター、国際教育研究会　Glocal net Shiga

◇　**国際教育教材体験フェアin滋賀** ……21
開催日　　平成23年（2011年）5月28日（土）　　会場　ピアザ淡海203・204会議室
主　催　　公益財団法人滋賀県国際協会
共　催　　独立行政法人国際協力機構大阪国際センター、国際教育研究会　Glocal net Shiga

◇　**海外経験を持つ方対象　伝え方講座** ……29
講　師　　荒川　共生　さん
ボルネオ保全トラストジャパン理事
開催日　　平成23年（2011年）9月3日（土）　　会場　コミュニティセンターやす研修室１・２
主　催　　公益財団法人滋賀県国際協会
共　催　　独立行政法人国際協力機構大阪国際センター、国際教育研究会　Glocal net Shiga

資 料 集

◇　滋賀県における外国人登録者数 ……39
◇　国際教育研究会　Glocal net Shiga　活動報告 ……40
◇　国際教育・開発教育貸出教材の紹介 ……42

実績報告

国際教育教材体験フェアin 滋賀 報告

海外経験を持つ方対象 伝え方講座 報告

国際教育ワークショップ　報告

地球市民を地域とともに育てよう Part 10
「ワークショップを使って もっと楽しく、
もっと深～い“国際教育”をやってみよう
～異文化理解・多文化共生を題材に～」

平成23年(2011年)度国際教育ワークショップ　地球市民を地域とともに育てようpart10

ワークショップを使って もっと楽しく、もっと深〜い“国際教育”をやってみよう！ ～異文化理解・多文化共生を題材に～

■概要

国際理解教育や人権教育分野等で、異文化理解・多文化共生の授業や講座、交流会がよく行われているが、生徒や参加者が受け身で終わっている。ワークショップの体験やワークショップ作りのノウハウ紹介などを交えた講座で、みんなで考え、話し合える「学びの場」を作る。

■講師の紹介

きのした　よしひと
木下　理仁さん

ワークショップ・クリエーター

かながわ開発教育センター（K-DEC）理事・事務局長

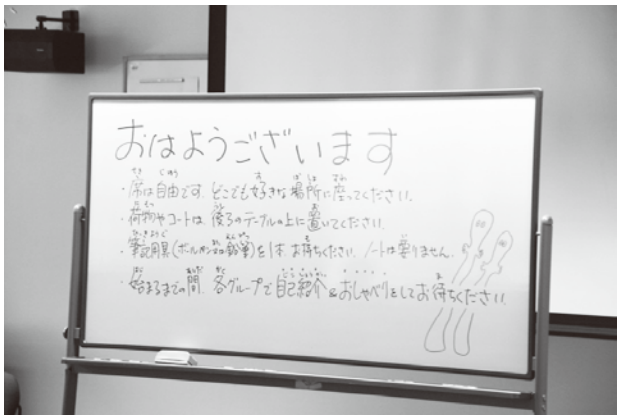
東京外国語大学　多言語・多文化教育研究センター　国際理解教育専門員

<木下理仁さん●プロフィール>
『貿易ゲーム(日本版)』『新・貿易ゲーム』『Talk for Peace!』『わくわく開発教育』など、開発教育の教材やワークショップの事例集の制作にかかわりながら、南北問題、平和、難民、人権、子育て、ライフスタイル、組織運営などのテーマでワークショップの実践を重ねている。小・中・高等学校、大学、専門学校、教員研修、NGOスタッフ研修などで、年間約50回のワークショップを行っているほか、東京外国語大学では、学生たちによる国際理解教育の授業づくりに助言している。

午前の部　ワークショップを体験してみよう！

■導入(木下先生挨拶)

東京から新幹線で京都で乗り換えて大津へ来ましたが、関東で暮らしている私は関西に来ると文化圏が違うので緊張します。エスカレーターに乗る時、関東は左側に、関西は右側に立ちますね。ですから、間違えないように緊張するんです。



私の趣味は落語で。桂三枝師匠の落語に国際理解、異文化間コニュニケーションをテーマにしたものがあります。６０代のある男性が英語の勉強を始めたのですが、そのきっかけになった海外旅行先のお店での珍妙なやりとりを題材にしたものなど。

今日は、国際理解教育ということで、午前中は皆さんに小ネタを経験していただき、午後は教材の作り方、ワークショップにチャレンジしていただこうと思います。

では、一緒にやりましょうと言っても、お互いどんな人か分からないとやりづらいので、少し自己紹介の時間を取りましょう。

■自己紹介

８グループ（３～５人）に分かれて自己紹介する。

（１回目）当たり障りのない自己紹介、一人20秒以内。

（２回目）「さっきは言わなかったんですけど」で始まる自己紹介。20秒～30秒で何か一つ付け加える。

■ワークショップ（１）「わたしの気持ち」

（１）ビデオ視聴

日本に来た住まい探しがスムーズにいかない外国の人たちを支援しているNPOボランティア団体の話題を取り上げたニュース。

ビデオの内容

なかなか住まいの見つからない外国人の問題を解決しようと、入居を希望する外国人を支援しようとする様々な動きが始まっている。

- 東京都に住む外国人４００人を対象にＮＰＯが行ったアンケート結果。部屋を借りるために回った不動産業者は一人平均１５軒以上。回答した人のほとんどが、不動産業者から相手にもされなかった経験があると答えた。
- 家主側の不安は（１）家賃がきちんと支払われるか（２）言葉の壁の問題
- ＮＰＯは外国人が住宅を借りやすくするための支援を行う団体を組織。
- 外国人がなかなか家を借りられない状況を新たなビジネスにつなげようという不動産会社の取り組み紹介。

（２）ワークシート「わたしの気持ち」

ワークシートの四角の中に「驚いた、面白い、かわいそう、腹が立つ、自分には関係ない」など気持ちを表す言葉がいろいろ書いてある。今のニュースを観て感じたことについて、自分の今の気持ちに近いものを三つ選んで〇をつける。ぴったりくるものがなかったら、右下に空欄に自分の言葉で書き入れる。二つ〇をつけて三つ目は自分の言葉で書いてもよい。

わたしの気持ちは・・・

おどろいた	おもしろい	かわいそう	くだらない
腹が立つ	わけが わからない	しかたがない	心配だ
自分には 関係ない	わくわくする	ずるい	悲しい
こわい	くやしい	うれしい	

（3）「わたしの気持ち」の分かち合い

どれを選んだか、なぜそう思うのか、ということをグループで５分間話し合う。

「わたしの気持ち」というワークシートを使い、ニュースの映像や新聞記事、誰かのお話などを紹介し、「これについて、どう思いますか？」と尋ねるときにワークシートがあることで、話のとっかかりがつかみやすく、他の人と比べるところから始められるという特長がある。

（4）感想・分かち合いの発表

私は「心配だ」「悲しい」「悔しい」に〇をしました。「うれしい」という意見もありました。外国人の方に住まい探しについて何とかしようという動きが少しずつでも出てきているということを知って、「うれしいな」と感じました。

高齢化社会の最先端をいっている地域に住んでいますが、外国の方が来られて地域のいろんな行事や活動にもし入ってくれるなら、もっと良くなっていくのかなと思い「ワクワクする」としました。

「面白い」に〇を付けました。困っているのが外国人だから何とか助けてあげようという動きが出てきたかなあと思いました。外国人だけというのに腹が立つ、他の人もゴミ出しなどきちんと出来ていないこともあるけど、外国人だけがそう見られていることに腹がたつ、という意見もありました。

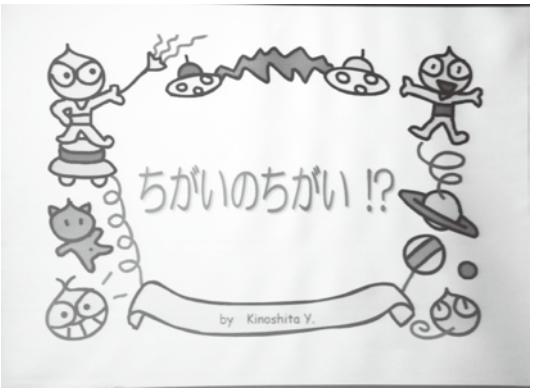
（5）まとめ

外国人だから世話してあげよう、ではなく、日本人にも保証人が見つからなくて困っている人や、ルールを守らない日本人もいる。外国人だけの問題とは限らない。

私は、地域でゴミ出しのルールが守れなかったり騒音がうるさかったり、家賃を払わないでそのまま帰国したり、部屋の中にゴミをいっぱい置いたまま帰国したという話も聞いたことがあるので、外国人にも非があるんじゃないかなと思いました。ちなみに私も外国人です。

はじめに観た時は腹が立ったり、悔しい、かわいそう、否定的な気持ちでしたが、最後に支援グループの活動紹介があり、自分でも力になれるのではと前向きな気持ちになり、「面白い」「うれしい」としました。

■ワークショップ（2）「ちがいのちがい」

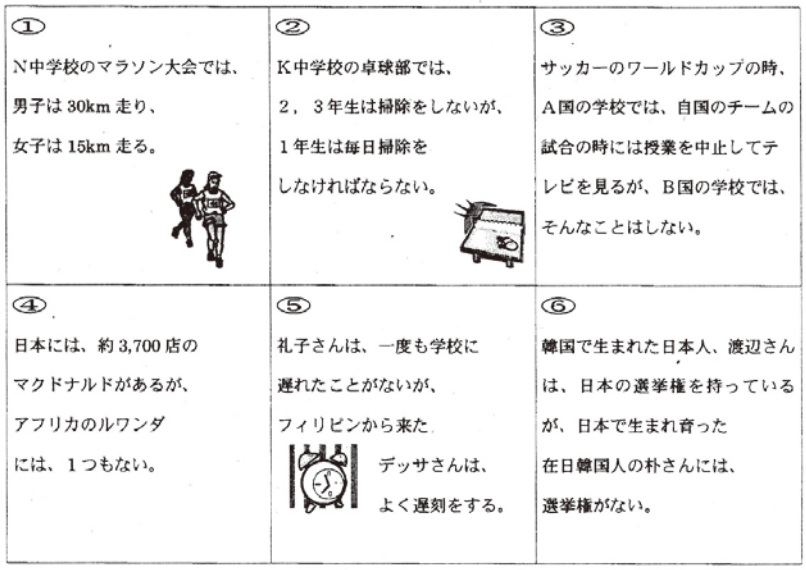


（１）手法の説明

世の中にいろんな違いがある。国と国で、あるいは関西と関東で文化や習慣が違うこともある。結婚してみたら奥さんと自分で生活習慣や価値観が違うということもある。例えばエスカレーターは東京では左側に、大阪では右側に立つ人が多い。このような文化の違い、習慣の違いについて、「あってよい」違いなのか「なくした方がいい」違いなのかを考えるためのワークショップが「ちがいのちがい」である。

各グループに３枚ずつカードを配る。そのカードに、「Ａは～だがＢは～だ」ということが書いてある。例えば、『ある中学校のマラソン大会では、男子は３０キロ走り、女子は１５キロは走る』。その違いは「あってよい」違いか「なくした方がいい」違いかをグループごとに話し合って、それぞれのカードを二つに分ける。

どうしても賛否両論あってわからないものは、真ん中に保留で置き、後でその理由も話し合う。



① N中学校のマラソン大会では、男子は 30km 走り、女子は 15km 走る。	② K中学校の卓球部では、２，３年生は掃除をしないが、１年生は毎日掃除をしなければならない。	③ サッカーのワールドカップの時、A国の学校では、自国のチームの試合の時には授業を中止してテレビを見るが、B国の学校では、そんなことはしない。
④ 日本には、約 3,700 店のマクドナルドがあるが、アフリカのルワンダには、１つもない。	⑤ 礼子さんは、一度も学校に遅れたことがないが、フィリピンから来たデッサさんは、よく遅刻をする。	⑥ 韓国で生まれた日本人、渡辺さんは、日本の選挙権を持っているが、日本で生まれ育った在日韓国人の朴さんには、選挙権がない。

（２）「ちがいのちがい」の分かち合い

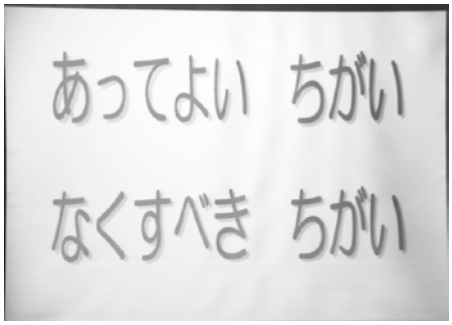
１番のカード
ある中学校のマラソン大会で、男子は３０キロ走り、女子は１５キロ走る。

◎あってよい違い、という意見

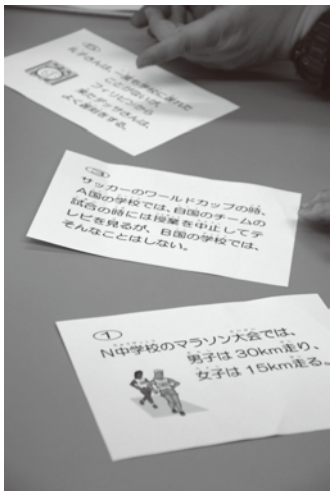
・中学生は身体的にも男女差がついているので、そこで差をつけるのは差し支えなのではないか。

◎なくすべき違い、という意見

・オリンピックでは男女関係なく同じ距離を測るし、タイムや順位を分けてあげれば、距離は同じでよいのではないか。
・男子でも走るのが苦手な子がいるし、女子でも走るのが得意な子がいるので、子どもの立場から考えると、距離は同じにしてもよいのではないか。



２番のカード
ある学校の卓球部では、二、三年生は掃除をしないが、一年生は毎日掃除をしなければならない。



◎あってよい違い、という意見

・これだけでは判断できない。例えば二、三年生は別の仕事をしているかもしれない。このクラブではずっとこれが伝統で、二、三年生も一年生のときには掃除をしていて、これで納得しているかもしれない、と考えると、一概には判断できないが、これだけで判断するのであれば、あってもよい。

◎なくすべき違い、という意見

・先輩後輩の関係はあってもよいと思うが、掃除に関しては三年生も部室や体育館を使っているので、みんなで掃除をした方がよい。

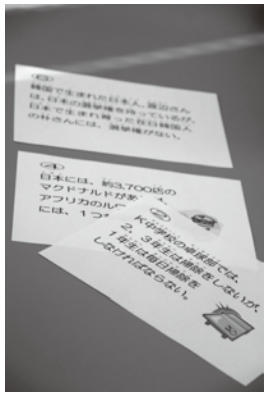
◎その他の意見

・交代して全員でやるか、分担する方がいい。

３番のカード
サッカーのワールドカップのとき、A国の学校では、自国のチームの試合は授業を中止してテレビを観る。B国の学校ではそんなことはしない。

・お国柄もあると思うので、別に構わないのではないか。そんなに意見は出なかった。

４番のカード
日本には約３７００軒のマクドナルドがあるが、アフリカのルワンダには一つもない。



◎あってよい違い、という意見

・経済的な違いもあるだろうから、あってもよいのではないか。

・食文化の違いがあるので、ルワンダの方が別にマクドナルドを求めていないのなら、別にいらないのではないか。

◎なくすべき違い、という意見

・全体的な意見としては、「あってもよい違い」としてまとまったが、日本にもなくてもいい、という意見もあった。

５番のカード
礼子さんは一度も学校に遅れたことはないが、フィリピンから来たデッサさんは、よく遅刻をする。

◎なくすべき違い、という意見

・フィリピンから来ました。私は、「なくした方がいい違い」だと思う。私の国では、遅刻はいけないこと。でも、日本では遅刻をしても許されているのか、と疑問に思う。
・日本人だからフィリピン人だからというのではなく、守るべき最低限のルールだという意見が出た。
・ルールは守るべきだが、この場合、デッサさんがどういう家庭状況にあるのか、例えば子どもを送ってから来ないといけない、そういう事情があるかもしれないので、一概にこれが悪いとは言えない。一応ルールとしては守るということで、事情がある場合はそれを考慮する。

◎付け加えたい観点

・ブラジルでも欠席したり遅刻する子どもがいるが、時間になると校門が閉まる。日本は制度が甘い。先生の話では、日本に来たばかりの外国人にいきなり厳しいことを言うのはどうかとはじめは大目に見るが、子どもはそれが許されるという認識になってしまうので、最初からきちっとルールを説明すれば、ちゃんと守れるのではないか。
・アメリカから来た人の話で。日本の社員はみんな10分前には来ている。でも自分だけ「外国人なのでいいですよ」と言われた。差別ではないが、なぜ自分だけ違うのかと思っていた、という話を聞いた。

６番のカード
韓国で生まれた日本人は日本の選挙権を持っているが、日本で生まれた在日韓国人のパクさんには選挙権がない。

◎なくすべき違い、という意見

・私自身は中国籍だが、日本で仕事をしているし、税金もきちんと払っているのに選挙権がない。私も日本の政治に関心があるし、日本の将来も心配しているので、なぜ選挙権がないのかと疑問を持っている。
・在日韓国人の方に限らず、日本に生まれ育った外国の方で日本に住み続けるなど何か条件をつけて選挙権を持てるようにすること、日本国籍で海外在住のため選挙に参加できない人もいるので、その条件は必要ではないか。

（３）まとめ

この６枚のカードは、正解が決まっているわけではない。実際には周りに取り巻く状況があり、それを抜きにして、この一点だけを見て論ずるということは、理論的に無理がある。でも話しているうちに、背景にある事情について話し合ったり、実際に自分の国ではこうだといったいろいろな話が出来ることがこのワークシートの面白さです。

■ワークショップ（3）「ランキング」

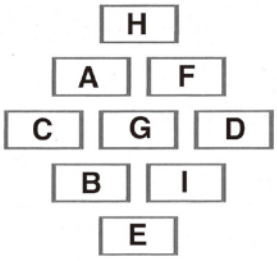
（1）手法の説明

いくつかの選択肢を、ある観点から優先順位をつけて並べる。まわりの人と意見交換しながら考えることによって、その問題をいろんな角度から見ることができ、また、多様な考え方、解決方法があることに気づいて発想が広がる。

（2）「駅前の放置自転車をなくす９つの方法」について

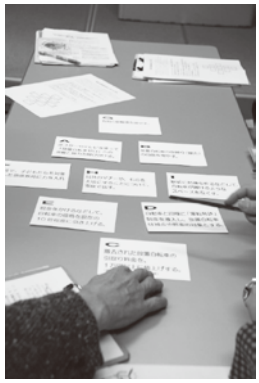
グループごとに「ランキング」の発表

◎グループAのランキング

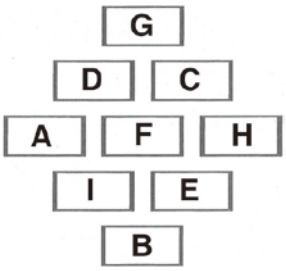


◎その理由

まず親がルールを教えることが大事。大人もルールを守って子どもに示すため啓発や道徳教育がその次。三段目にＣをもってきているのは、自転車がどうしても必要な方がいる。Ｅの自転車の価格を上げるというのは、車を持てない人のためには避けなくてはならない手段。



◎グループBのランキング



◎その理由

抑止力的にはＢＣが効果的。ＡＦは家庭や一般でルールはこうだと呼びかけていくのがいい。困る人が出るＩＥＢはその下になる。

（3）それぞれの目のつけどころについて

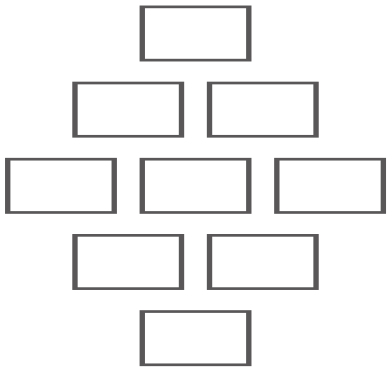
◎中古の自転車屋を増やす

・故障した自転車を置いていってしまう。それなら中古屋に持っていって、500円でも買い取ってもらえると、放置自転車が減るのではないか。

駅前の放置自転車をなくす９つの方法

駅前の放置自転車をなくすための取り組みとして、以下に９つの方法が記されています。
これらの取り組みの“順位づけ”をしてみましょう。いちばん有効なもの、最初にすべきことが最上段の□の中に、次にすべきことが２段目に、以下、最も効果が薄いこと（あるいは最もすべきでないこと）が最下段の□の中にくるように、Ａ～Ｉの記号で書き入れてください。
なお、それぞれの取り組みにかかる経済的なコストは、考えないものとします。
個人で記入した後で、隣の人とあるいはグループで意見交換して、結論を出してみましょう。

Ａ　ポスターやテレビを使って、「放置自転車ゼロ」への理解と協力を呼びかける。
Ｂ　放置自転車の取締り（撤去）の回数を増やす。
Ｃ　撤去された放置自転車の引取り料金を、１万円以上に値上げする。
（現在は、2,000～3,000 円程度）
Ｄ　自動車と同様に「運転免許」制度を導入し、放置自転車は減点や罰金の対象とする。
Ｅ　税金をかけるなどして、自転車の価格を現在の 10倍程度に引き上げる。
Ｆ　学校で、子どもたちを対象とした道徳教育に力を入れる。
Ｇ　有料の駐輪場を増やす。
Ｈ　公共のマナーや、ものを大切にすることについて、家庭で話す。
Ｉ　駅前に花壇を作るなどして、自転車が置けるようなスペースをなくす。



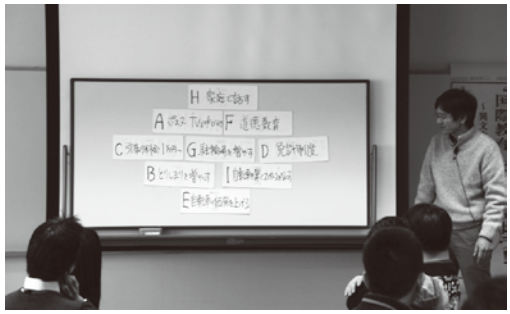
◎自転車の価格を上げる

・今の値段よりは何倍もの値段になっていれば、自分のものを大事にして放置しないという意識が働くのではないか。

◎海外の例

・電車で移動するときに、自転車を持ち込める制度のある国がある。駅の階段にもスロープが設置されていて簡単に乗り込める。

・ブラジルでは歩道を広くして、そこに自転車を置けるスペースを作っている。



（4）まとめ

この手法は「ランキング」と言って、解決策をいろいろ見ていくことで、問題をいろんな角度から見ることが出来ます。

いろんな国の人がいると面白いアイデアが出てきます。日本人だけでやっても、いろんな経験の違いから、目の付けどころの違い、あるいはここにない解決策が出てくるかもしれません。一つの問題についていろんな角度から考えることができる手法です。

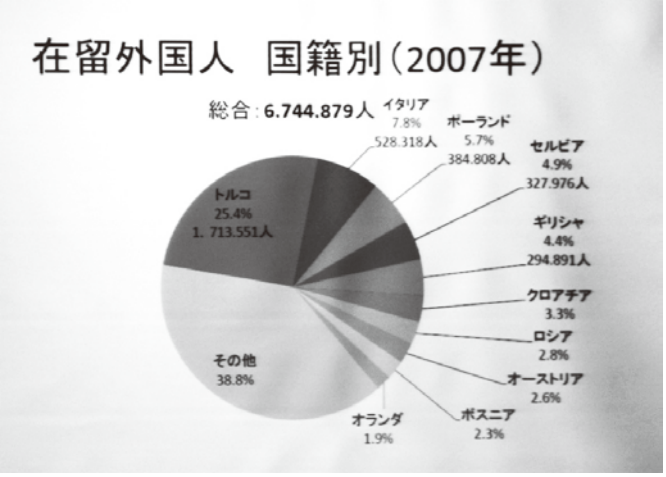
■事例の紹介

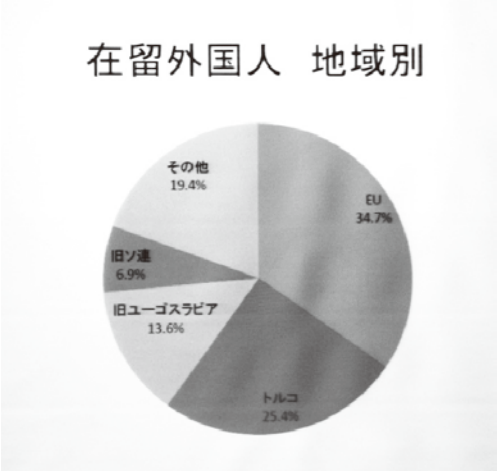
ドイツから来て熊本県で働いている国際交流員の方が考えたものです。この中にドイツ人でない人、どの人とどの人でしょう、番号で答えてください。人数は内緒です。

では、正解は、2010年ワールドカップのドイツチームのメンバーで全員がドイツ国籍です。チーム全体では23人いますが、そのうちの11人は移住の背景を持っています。ドイツには、移住の背景を持っているドイツ人が9.5%います。

移住元の国籍で一番多いのは、トルコです。ポーランド、ベルギー、イタリアが続きます。ドイツは多民族国家ですが、ただプレゼンテーションをしてもあまりぴんとこないので、こういう形式でやってみました、ということです。

ワークショップは、自分が伝えたいことをそのまま報告するプレゼンテーションと違って、これをどう思いますか、と考えるきっかけを提供するものです。そこでああでもない、こうでもないと言い合える仕掛けが必要かなあと思います。





■意見交換

Q．外国人という言葉自体に差別を感じるという人がいるが、どう呼べばいいか？

A．日本に来て「ウチ」と「ソト」がはっきり分かれているようなところで「外国人」と言われると、なかなか中に入れてもらえないんだという気持ちになる。私はブラジル人です、と言うと、近くの人がさーっと去っていった経験もあるので、外国人というだけで、そういう目で見られるというのがイヤなのであって、言葉自体の問題ではない。

Q．フィリピンやブラジルでは、日本語でいう外国人のことをどう呼んでいるか？

A．私はブラジルの日系人の少ない地域に住んでいた。小学校のとき、日系人は学校に私一人だったので、名前より先に「ジャポネーズ」と言われていた。名前を知っているのにそう呼ばれるのでイヤな思いをした。ブラジルでは名前が分かれば名前で呼ぶ。

A．簡単に見た目でグループ化してしまうというところがある。日本人、外国人、という言い方にこだわる人もいれば、ヘンなあだ名をつけると悪い意味に取る人もいる。人によるのではないか。

午後の部　楽しく、深いワークショップとは？
～身近なところへ目を向けてみよう～

■導入「カレンダーは教材か？」

このカレンダーは「教材」だと思いますか？　教材じゃないという方、手を挙げてください。

カレンダーは教材にする意図を持って教材にしないとカレンダーでしかありません。これが教材になるかどうかは、「ねらい」「素材」「手法」の三つの組み合わせがあるかどうかにかかっています。

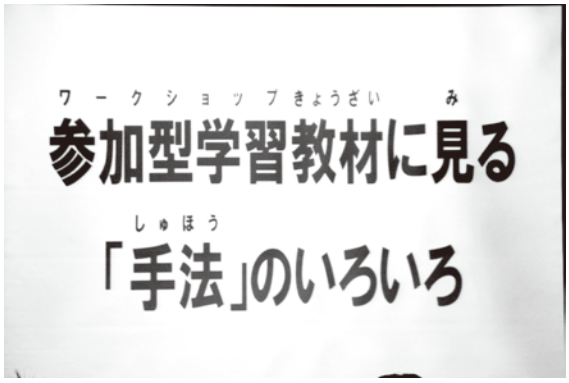
今日の午後は、皆さんの体験や日頃経験したエピソードを素材にします。狙いは、多文化共生について考えること。手法は、今日午前中にやったようなこと、この三つを組み合わせて教材を作っていきます。

さらに、対象者も考えないといけません。小学生なのか中学生なのか、高校生なのか大人なのかとか、外国に行くと思っている人がどれくらいいるか、ある目的を持って集まった人たちなのか。対象者によってこの教材を使ったり、アレンジしたり、あるいは一年間のカリキュラムの中のどのタイミングで使用するかということ。それをはずすと一所懸命に作っても対象者にはピンとこない教材になってしまいます。

このほかにもこんな手法が…

- フォト（もの）ランゲージ
- シミュレーション、ゲーム
- ロールプレイ
- プレイン・ストーミング
- ディベート
- 部屋の４隅
- プランニング
- メッセージ作り

■午前中に取り組んだ教材の紹介



（１）わたしの気持ち

ある出来事や問題について知ったときの自分の気持ちについて、他の人と話し合う。同じ出来事でもいろんな見方や感じ方があること、一つの出来事にはいろいろな側面があることを知る、という方法。

ワークシートがあることで、全員が「私はこう思った」と土俵に乗りやすい、あるいは、子どもたちだと、いつも積極的に手を挙げる田中君だけではなく、おとなしい鈴木君も、先生が聞くことで自分はこう思いましたと言える。みんなが参加しやすいのがワークシートの良いところ。

ここで大事なのは、素材の選び方。いろんな角度から見る事のできる素材、賛否両論あるものや、プラスとマイナスの側面の両方があるものが良い。

（２）ちがいのちがい

Ａは～だがＢは～だ、という違いが書かれたカードを用いて、「あってよい」違いか、「なくした方がいい」違いかを話し合うことにより、文化の違いや価値観の違いについて知り、考えていくというもの。これは、○か×かで結論を出すことに実はそれほど大きな意味があるわけではなく、話題を提供するきっかけになる。

このカードは男女の違い、健常者と障がい者の違い、個人個人の考え方の違いなど、様々な違いを取り上げることが出来る。教材として作るときに大事なことは、「Ａは～でＢは～だ」という文章を書くとき「日本人は～だがアメリカ人は～だ」としないこと。なぜなら違いを一般論として扱うと「一概には言えない」で終わってしまうため。だから「日本人は遅刻しないけどフィリピン人は遅刻する」ではなく、「礼子さんは遅刻したことがないけど、デッサさんはよく遅刻する」となる。それがたまたま、一方は日本人で一方はフィリピン人だった、この違いをどう考えるかということ。

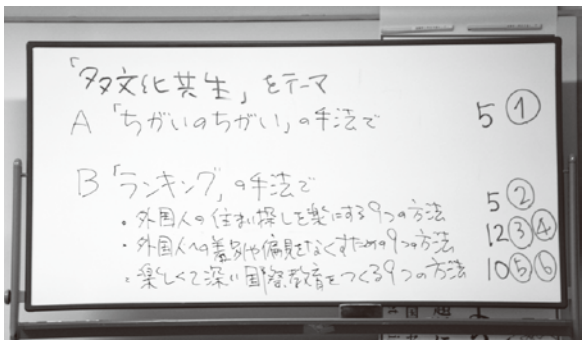
（３）ランキング

いくつかの観点から優先順位をつけて並べてみる。いろんな人と意見交換をしながら考えることによって、その問題をいろいろな角度から見る事ができ、いろんな解決方法があることに気付き発想が広がる。

先ほどやったダイヤモンドランキングの他に、ピラミッドランキングというやり方もある。ただ、ダイヤモンドランキングの９つぐらいの選択肢が考えやすい。

ランキングにもコツがあって、ＡからＩまで、だいたい３つずつぐらい、性格の似た選択肢をバランス良く作る。例えば啓発的なもの、抑止力、環境整備、といったカテゴリー、あるいは家族や友達と出来ること、地域で取り組むこと、国や世界レベルのお話、などのようにバランス良くいろいろ取り混ぜるのがコツ。もう一つは、一つの選択肢にあれもこれも入れない。できるだけシンプルにする。

■「教材づくり」の手法



地域社会をよりよいものにするためにどうしようか、ということを大きなテーマにしながら６グループに分かれて教材づくりに取り組む。

グループ分けはまず、自分のやってみたいものを選び、グループになって１時間後に各グループ７分で発表。発表の仕方は自由。

●グループ（１）

「ちがいのちがい」の手法で、アイデアをいっぱい出して、いろんなカードを作ってみる。

●グループ（２）

「ランキング」の手法で「外国人の住まい探しをラクにする９つの方法」というテーマで選択肢を作る。

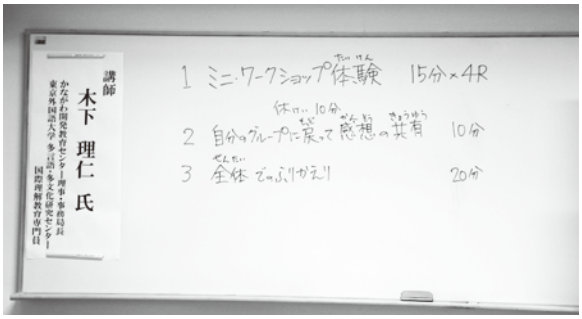
●グループ（３）（４）

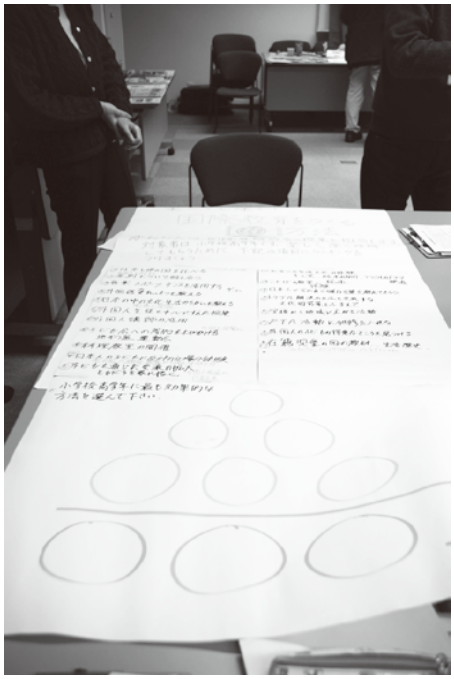
「ランキング」の手法で「外国人の差別や偏見をなくすための９つの方法」というテーマで選択肢を作る。このとき大事なことは、外国人のために日本人が何をすべきか、という観点だけでは必ずしもないということ。行動主体は日本人で、助けてあげる対象が外国人なんだ、という発想を一歩抜け出さないといいものは出来ない。環境を変えるために、一緒に何が出来るかということも含めて考える。

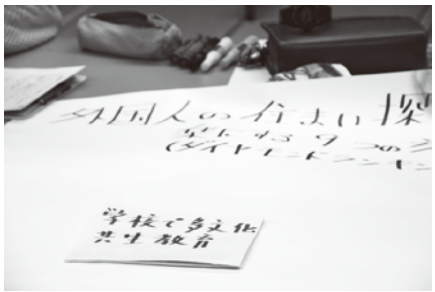
●グループ（５）（６）

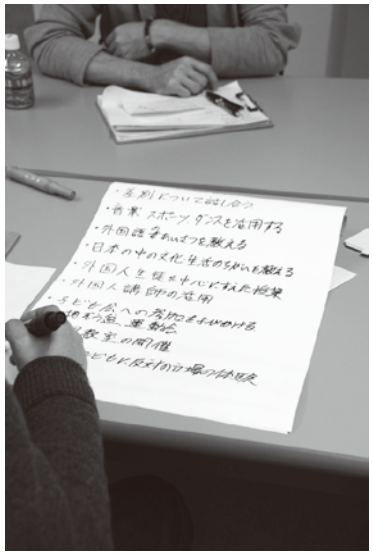
「ランキング」の手法で「外国人の差別や偏見をなくすための９つの方法」というテーマで選択肢を作る。

グループに分かれて、教材づくり（１時間）





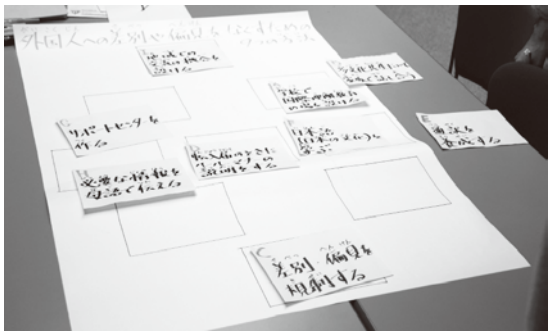


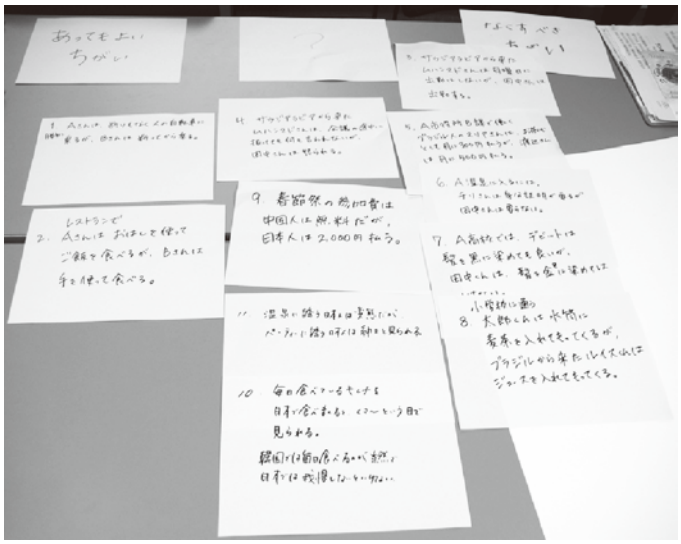


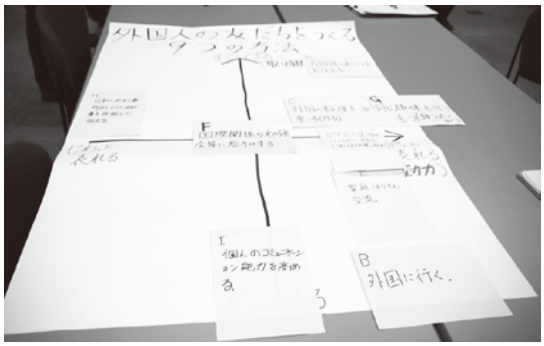
■ミニワークショップ体験（15分×4ラウンド）

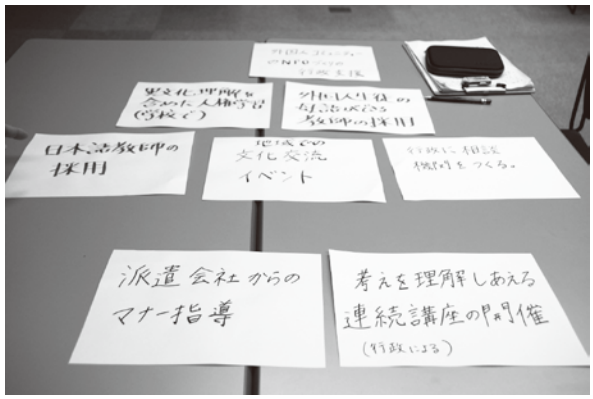
15分で、各グループで作られた教材をダイジェスト版で体験。15分が4ラウンド。誰か一人か二人は説明係で残り、残りの人はほかを見て回る。全部見るのは不可能なので、おもしろそうなところを見る。4つ見て回ったら元のグループに回って、感想などを共有する。

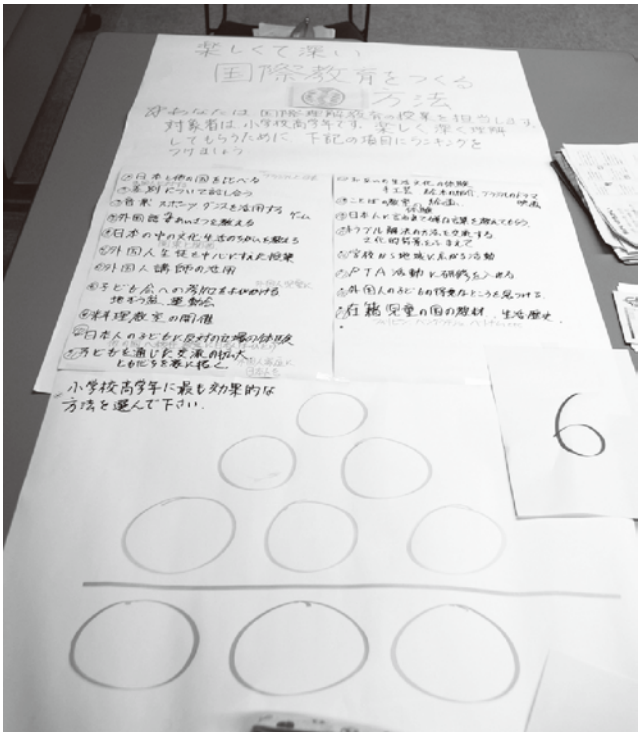
●各グループ（６つ）の教材

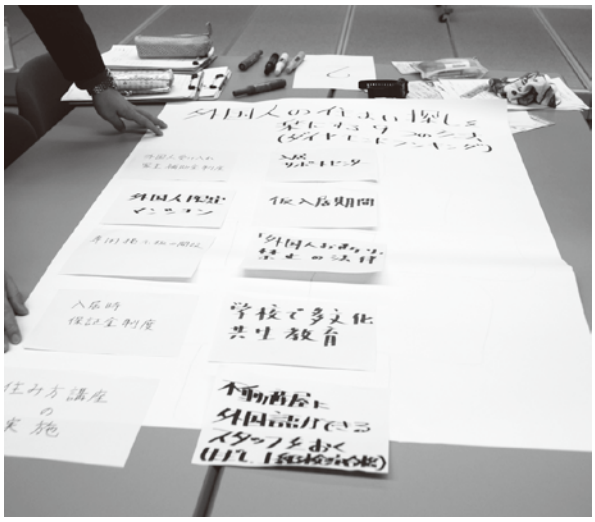












それぞれのグループを回って教材を体験

■自分のグループに戻って感想を共有（10分）

いろいろ見て回って、あるいは自分で教材を説明して、感じたことをグループで共有する。

グループごとに、感想を分かち合って共有

■全体でのふり返り

それぞれのグループでどんな話が出たかを発表する。

（1）「ちがいのちがい」のグループ

分かりやすい文章を作ろうと、シンプルな文章を作ったのですが、そうすると「こう考えて欲しい」と思うことに対して皆さんは違う観点で見ていることがわかりました。人によって見る観点が全然違うということが「ちがいのちがい」の面白さだと実感しました。

木下　面白く議論の深まったカードはありましたか？

「温泉に誘う日本人は変態だが、パーティーに誘う日本人は紳士に見える」というカード。タイでは同性でも裸を見せたり、同じ場所で着替えたりしないので日本人は変態に思えるそうです。持っている価値観が違うんだということを感じました。

「Ａさんは断りもなく人の自転車に勝手に乗るが、Ｂさんは断ってから乗る」。ガーナの人たちには「これはオレのもの」という意識があまりそうです。ですから自転車があれば「みんなで使おうよ」となる。でも日本で同じことをすれば盗難になります。でも、中には日本でもＯＫだ、これをしてみんながケンカもなく平和に楽しく過ごせるようになれば全然ＯＫでしょ、という意見も出ました。

木下　「ちがいのちがい」は、コンパクトに書くがゆえにいろんな角度から議論が出来ます。意図したところとは全然違うところに発展していくところがあります。手法としては、中学三年生の公民の教科書で紹介されているので、中学生レベルでも出来るでしょう。いかに取っ付きやすい文章を作るかがコツです。

（２）「外国人の住まい探しをラクにする９つの方法」のグループ

「外国人の住まい探しをラクにする９つの方法」のダイヤモンドランキングを作成しました。１枚捨ててもいいカードを作ろうということで、カードは10枚作りました。人によってそれぞれに１枚を捨てる理由があって勉強になりました。

実際の経験に基づいてこのカードができていたので、理解が深まったと思います。

木下　こちらのグループでは非常に具体的なテーマを取り上げていただきました。ランキングのテーマは「人間が幸せになるために必要なものランキング」など抽象的なテーマでも出来るし、具体的なテーマでもやることがあります。具体的なテーマの場合は、見聞きした話が参考になります。実際外国人の立場で話が出来る人がいると、なるほどね、と実感することができます。

（３）「外国人の差別や偏見をなくす９つの方法」のグループ　その１

私たちは９つの選択肢を作ることができませんでした。具体的に言葉にするのが難しく、最終的に８つの選択肢としました。ダイヤモンドランキングを４回行いましたが、やるたびにランキングが変わりました。面白かったのが、「外国人コミュニティのＮＰＯづくりの行政

支援」です。外国の方のコミュニティに行政が委託して、外国人の方がもっといきいきと暮らせるシステムを作ると良いのでは、と考えて私たちはこれをトップにしましたが、別のグループでは下にランキングされました。なぜかというと、外国人コミュニティに全部任せてしまうと、行政が多文化共生を考えるチャンスがなくなってしまうというのです。むしろ外国人コミュニティと日本人コミュニティの分断が起こってしまうという指摘を受けました。

やってみて分かったのは、外国の人たちが安心して暮らせる視点と同時に、日本人社会がどう意識を変えていくのかという二本柱を並行していかなければならないということです。

木下　「多文化共生」というテーマ自体、社会的に孤立しがちな人をどうサポートするのかというのと、そうでない人がどう意識改革をするかという横の視点を持った上でバランス良く作っていかないといけません。私が気になったのは、「異文化理解を含めた人権学習（学校で）」とか、「考えて理解し合える連続講座（行政による）」など選択肢に限定があることです。限定すると「なぜ限定してしまうのか」という議論になってしまいます。それよりも、かっこ書きなしでこういうことを外国人の人も一緒にできた方がいいね、という話が出てくる方が良いと思います。

（４）「外国人の差別や偏見をなくす９つの方法」のグループ　その２

話し合いの中で、大きなテーマが出てきました。「知ること」と「体験すること」。お互いのことを知り合い、またルールを最初に説明するために通訳の重要性が話に出ました。

体験することでは、国際理解の授業や地域での取り組み、交流が必要だという意見が出ました。

「差別や偏見を否定する」という選択肢は、４回とも最後になりました。他のグループを回っても、交流の場があれば、という意見が出ていたので、そのような場があれば、もう少し偏見がなくなるのではないかと思います。

木下　私が「参考までに」とお渡ししたランキング「多文化共生の社会をつくる９つの方法」に似ていますが、この中にもＧという選択肢があります。「外国人に対して差別的な行いをした人を罰する」。これはよく一番下に来るんですが、ときに一番上に置いたりと割と高いところに置く人もいます。というのは、多民族国家と呼ばれるオーストラリアやカナダなど先進国の多くで、民族差別、人種差別禁止法という法律があり、罰せられます。日本のようにそういう法律がない方が珍しいんです。啓発活動だけではなく、しっかり社会の中でルールとして示すことが大事だという考え方もあります。

（５）「楽しくて深い国際理解教育の９つの方法」のグループ　その１

木下　このグループは視点を変えて「外国人の友達を作る９つの方法」とし、座標軸を作られましたが、振り返ってどうでしたか。

時間の半分を、題名を決めるところに費やしました。次にこのランキングを誰に対して、どういう狙いをもってするのか話した結果、広く地域住民的な人たちが多文化共生社会を作っていくための教材という形に収まりました。

次に、ダイヤモンドランキングは一つの座標軸で、上から下まであるんですが、一つの材料で一つの座標軸での上下もつけにくい。取り組みやすさ、取り組めるまでの時間や効果の大きさを考え、二つの軸を取ってみました。

実際にやってみたところ、難しいと思ったのはカードの表現です。教材づくりの段階で綿密に練られなければならないことを学びました。

木下　テーマが難しかったということですが、「楽しくて深い国際理解教育の方法」に主語をつけてみるというのも一つの方法です。学校の先生が、とすると先生の立場で何をするのか、教材を集める、地域の協力者を見つけるなど、具体的に選択肢が出やすいと思います。

座標軸は、縦軸がすぐできること、時間をかけてやること、横軸が効果がじわっと現れるものと即効性のあるもの、ということで作っていただきました。これも善し悪しで、ランキングでは「即効性を考えたらこういう順番だけど、20年後の成果を求めたらこういう順番だ」という議論になるんです。例えば「戦争をなくすための９つの方法」を考えると、即効性では「今紛争当事国になりそうな首相に働きかける」。「子どもたちを対象にした平和教育」は来週起こるかもしれない戦争には間に合いませんね。この選択肢のどちらが上かというのはとても難しい。それを座標軸にするという考え方はあり得ます。ただ、それをあえて示さないで、Ａさんは平和教育から考えた。Ｂさんは目前にある危機を回避する方法を考えた、という違いが出ることが面白いと思うんです。「目の付けどころによって同じカードでも違って見えてくるね」という議論が出来ることも、ランキングの良さだと思います。最初から座標軸を与えてしまうと、そこにあてはめることに視点がいってしまい、他の視点が出づらくなります。だから、あえて曖昧なまま与えて、人によって視点が違うということの面白さを楽しむことも大事だと思います。

（６）「楽しくて深い国際理解教育の９つの方法」のグループ　その１

このグループでは、対象者を小学校高学年に設定して思いつくままに19の選択肢をあげていきました。

実際にやってみた中で、「学級でやる」「地域でタイアップしてやる」など整理して出した方がいいのでは、という意見が出ていました。また、外国人の児童を大切にすることが、日本の児童１人ひとりを大切にすることにつながるという視点を持つことが大切だという意見も出ました。

今の小学校の子どもたちを教える先生や学校に何が欠けていますか、と聞くと、日系人の方が日本に来るのはただ単に仕事のため、という捉え方が非常に多いということです。移民の歴史や入管法の改正などの知識を持つ必要もあるという意見が出ました。

木下　こちらは主語を明確にして、目的を明確にすることでクリアしましたね。ランキングは、学習の前と後でやるととても面白いんです。外国人が今どんな課題を抱えているか、今日本の社会にどんな問題が起きているかということを学習する前に外国人を話題にランキングをして、学習活動の後にもう一度やってみると、自分の考え方の変化が見えて面白いので、試してみてください。

■感想とまとめ

木下　今日は、ワークショップを体験し、教材を作っていただきましたが、どうだったでしょうか。

私は初参加でしたが、普段関わる人たちとはまた違った人たちと出会うことが出来て良かったです。いろんな考えを聞けたのが面白く、楽しい時間を過ごさせてもらいました。ありがとうございました。

木下　時間をかけて練り上げていくのが大事ですね。今日の教材を持ち帰って、もっと面白いカードが出来ないか、考えてみてください。滋賀県は環境的にも恵まれている地域だと思うので、ぜひ継続的に取り組んでください。

今日はどうもありがとうございました。

今回、参加された37名のうち、およそ3分の1が外国にルーツを持つ方たちということもあり、文字どおり「異文化理解・多文化共生」を考えるにふさわしい『学び合いの場』となりました。

参加者からは講座終了後、

- ワークショップは、講演者が自分の考え方を伝えるのではなく、参加者が色々な発見をする場だと教えていただいた
- いろんな立場や出身の方と一緒にアクティビティを行ったのが新鮮だった。日本人とは違う見方、考え方に触れられたのがよかった
- ワークの内容からだけでなく、ワークを通して人との考えの違いや自分の気づかなかったことに気づけたりできるということがわかった

といった感想が寄せられました。

2011年度「国際教育教材体験フェア in 滋賀　part 2」

日時：2011年5月28日(土) 13:00～16:45
会場：ピアザ淡海　　参加者数：５１名
主催：滋賀県国際協会　共催：JICA大阪国際センター、国際教育研修会　Glocal net Shiga

第1分科会
『言葉が分からない』体験ゲーム　何が起こった？（震災編）

■講師：川﨑　功さん（国際教育研究会　Glocal net Shiga）　■参加者数：23名

（１）アイスブレーキング　＜部屋の四隅＞（10分）

講師の質問に対し、4つの回答に合わせて部屋の4つの隅に分かれる。

質問①外国人に「駅までどうやって行ったらいいですか」と英語で尋ねられた場合、教えるか？

・「はい」（教える）；他の人に聞いて教える、地図を書いて教える
・どちらかといえば「はい」；自信が無い、教えても分からないと思う
・どちらかといえば「いいえ」；「No speaking English」という、英語で話しても伝わらない
・「いいえ」（教えない）；私自身も地理が分からないから教えられない

質問②滋賀県に大きな影響があるような（若狭湾沖などで）大地震が起こると思うか？

・「はい」；日本全国至る所で地震が起こっているから、過去にも記録があるから
・どちらかといえば「はい」；原発があるから心配している、可能性はある
・どちらかといえば「いいえ」；滋賀県は安心だと思っている
・「いいえ」；まさか地震が起こるとは思っていない、滋賀県は大丈夫と思う

（２）体験ゲーム（55分）

☆本教材は、Glocal net Shigaが2年ほど前から構想を練り、2011年1月に完成した。

海外で現地の言葉も何もわからない状況で被災してしまったら…？という設定のシミュレーションゲームを体験。アナウンスが聞き取れない、標示の内容が理解できないという場面ごとに、参加者の顔に戸惑いが見られました。

設定：参加者は小学5年生。最近家族と一緒にこの国に引っ越してきたばかりで、この国のことや言葉も分からない。

①　ある日、図書館で本を探していたら、地震が発生。放送が流れたが、何を言っているのか分からない。図書館から出てみると標識が2つ。自分の判断で従う標識の方に分かれる。

1）黄色の右矢印と理解できない言葉
2）緑色の左矢印と理解できない言葉

【結果】

1）⇒割れたガラスがいっぱいで怪我をする（怪我の印に片方の靴を脱ぐ又はシールを貼る）
2）⇒無事に校庭に避難

② 地震のために学校から帰宅できず、体育館で過ごすことになる。2本の異なる表示のペットボトルが配られるので、選んだ方に分かれ、試飲する。

【結果】 1）⇒飲料水

2）⇒トイレ用水（実際は塩水）で腹痛を起こす（腹痛の印にゴムベルトをお腹に巻く）

③ ①と②の結果に応じて、以下のグループに分かれる。

④ お腹がすいてきたところ、壁に2種類の掲示が貼り出されたので、グループの代表者が選択してその掲示の前に並ぶ。（両者ともに並ぶことも可能。）

⑤ ④の食料配布の受け取りの際、4つの分からない言葉のどれかを指差し、それに従ったものを受け取る。

⑥ 救急セット配布のアナウンスがあり、必要なグループは4つの分からない言葉のカードから選択し、それに従ったものを受け取る。

⑦ 一晩を体育館で過ごした後、無事帰宅。

⑧ 避難生活でどんなことを感じたか、振り返りシートに個々に記載し、それを元にグループ毎に話し合う。

〔質問〕もしあなたの学校・地域に日本語が分からない子どもや大人がいるとしたら、地震が起こった時にその人たちが安全に安心して避難するためには、どんなことが必要だと思いますか？

⑨グループ毎の話し合い結果を発表。

- 英語やイラスト付の表示。（パンフレットの多言語化・イラスト付表示）
- 事前に外国人の居住やその人が話す言葉を知っておくこと。
- 避難訓練を行い、避難場所と経路を確認すること。
- 外国人を1人にしないよう、グループでの避難を決めておくこと。
- 日頃からの地域の人々とのコミュニケーション。
- 文化が違うので、自分たちの当たり前が通じないことを意識すること。
- 簡単な日本語を外国人に覚えてもらうこと。
- ボランティア体制を整えること。 など

（3）「東日本大震災を経験して」 （10分）

災害時には、日頃からある問題が顕在化する。外国人は要援護者だが、支援を受けるだけではなく、支援する側としても期待でき、地域社会の一員として“共生”していることを心に留めておいてほしい。

＜まとめ＞ （5分）

外国人は災害時要援護者とされているが地域社会の一員であることや、言語からの情報が分からない人たちには、外国人だけではなく、障がいをもつ方や認知症の方々も考えられることから、一番大切なことは「お互いを思いやる心」ではないだろうかと講師の川﨑さんが締めくくられました。

参加者からは、「文化背景が違うので、自分たちの当たり前が通じないということを意識することが大切」「日頃からの外国の方と地域の人々とのコミュニケーションをとっておくことが必要」といった意見が出されました。

第２分科会
「え！？友だちは外国人？～違いを認める関係づくり」

■講　師：嘉本　有里子さん（竜王町立竜王小学校）　　■参加者数：23名
ゲスト：ファニー ルセシナ プリメラさん（外国人児童保護者）

（１）仲間づくりアクティビティ「４つの中から」(25分)

一つのテーマの中から、決められた4つの選択肢を参加者が選び、同じもの同士でグループになる。選んだものがなぜ好きなのかをグループの中で発表する。

＜テーマ例＞
①季節（春夏秋冬）+出身地
②食べもの（和・中・イタリアン・タイ料理）+血液型
③得意/好きな言語（英語・中国語・韓国語・ポルトガル語）

◆３回が終わったあと、質問をされた。
Q1「3回とも同じグループになった人はいましたか？」
Q2「3回とも同じだと思ったときはどう思いましたか？」→「嬉しかった」「親近感が沸いた」など
Q3「一つも同じではなかった人は？」
Q4「一度も同じでなかったことをどう思いましたか？」→「違う人もいるんだなぁと思った」

（２）実際の授業の進め方（25分）

※嘉本さんのクラスにはＫ君という両親がベネズエラ人の児童が在籍しているため、その児童との関わりの例を話されました。

①知るための活動
・外国人児童生徒教育支援員の利用　→支援員（元青年海外協力隊）によるベネズエラの紹介
・担任（元青年海外協力隊）によるニカラグア紹介
　→Ｋ君の母国ベネズエラと似ているところ、違うところの紹介
・スペイン語のあいさつ、歌を教える　→学校の授業でクラスメイトたちとスペイン語の歌を披露
・外国人児童保護者の自国紹介→楽器の演奏

②認め合うための活動　グループエンカウンターの手法
・「４つの中から」の活用　→　上記（１）参照
・ありがとうカード
　→席替えをするたびに、隣の席の児童によかったところや感謝していることなどを書いたカードを渡し合い、お互いがいい気持ちになってから新しい席に移ることを実践された。

（３）ファニーさんの楽器演奏（10分）

実際に授業参観で行ったように外国人児童保護者のファニーさんによるベネズエラの楽器クアトロ（４弦楽器）の演奏。

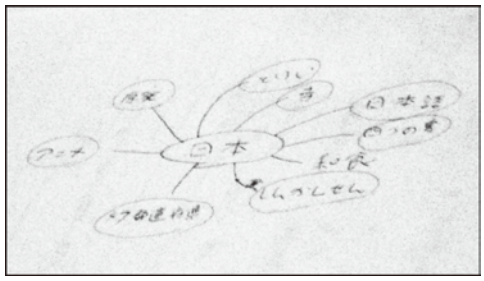
◆ファニーさんより、「授業参観で演奏した後、それまで感じていた壁のようなものが消え、子どもたちも他の保護者の方たちも私に声をかけてくれたり、教室まで案内してくれる

ようになったりと距離が縮んだことを感じられるようになりました。」と胸の内を明かしてくださいました。また嘉本さんより、他の保護者からも「クラスに外国の子どもがいるおかげで、子どもたちがスペイン語の歌を歌えるようになったり、違う国のことに興味を持つことができるようになってよかった」といった感想も聞こえてきたことが紹介されました。

（４）その他のグループエンカウンター事例（25分）

①マインドマップ

・白紙の真ん中に〇を書き言葉を一ついれる
・その言葉から連想していくことを回りに書き出す
・隣に座っている人と紙を交換し、「自分とは違うこと」を赤でチェックしていく
・一つの言葉から連想するものが、人それぞれ違うんだということを認めあう。



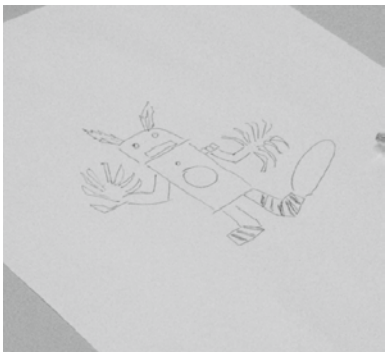
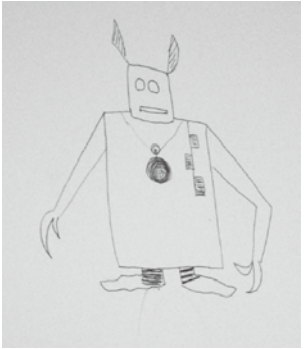
◆今回は「日本」をキーワードに行いました。

②テレパシーをキャッチ

・先生がある絵の特徴を順に言っていく
・参加者はそれを白紙に自分のイメージで書いていく
・出来上がったものを周りの人と見せ合う

四角や丸、模様のつけ方など単純なものでも人それぞれイメージが違うということを、絵を描くことで学ぶ手法

◆ロボットのイメージを今回は使いました。

（５）外国人児童のとらえ方（5分）

◆嘉本先生は去年の同セミナーで「外国人児童はそのクラスにとっての宝」という考え方に衝撃を受けて、今回紹介した授業を実践されました。しかし、一部では外国人児童をとりあげることによって「不平等ではないか」という保護者からの意見もあるとのこと。そのような経験はないか、そういうときは、どう対応しているかを参加者に意見を聞こうとしたところで時間切れになりました。

外国人児童保護者　ファニー　ルセシナ　プリメラさんの感想

今回、学校とは関係のないところで自分の国のことを知ってもらえる機会を与えてもらえてとてもうれしく、そして満足感がありました。今まで、コミュニティ活動に参加することは数少なかったのですが、子どもたちそして保護者のみなさんに自分の国の紹介ができたことを誇らしく思っています。

今回の分科会に参加して、異なった文化を受け入れようとする日本の方たちの広い心に感動しました。

第3分科会
非識字体験ゲーム　『はじめてのお見舞い』

■講師：　川嶋　稔彦さん（国際教育研究会　Glocal net Shiga）　■参加者数：25名

（1）アイスブレーキング　『ラインナップ』

ルール：声を出してはいけない
自分の携帯の下4桁0000～9999の数字の若い順に順番にならんでいく

（2）非識字体験ゲーム「はじめてのお見舞い」（約60分）

海外に引っ越したばかりの子どもが、現地の言葉が理解できない中でお買い物に出かけたら…という設定のシミュレーションゲーム。バスの行き先や品物の名前などがすべてタイ語で示されています。読めない、音声を聞いてもわからない。最後は、身振り手振りで行きたい場所や買いたいものを伝えてみるという体験をしました。

ミッション①：バスで八百屋に行く
ミッション②：店でりんごを買う
ミッション③：バスで花屋へ行く
ミッション④：花屋で黄色い花を買う
ミッション⑤：バスでコンビニへ行く
ミッション⑥：コンビニで新聞を買う
ミッション⑦：コンビニで歯ブラシを買う
ミッション⑧：バスで病院に行く

在日ブラジル人の体験談を読む
振り返りシートの記入

ジェスチャーで伝えている様子

【参加者の意見】

何に困ったか？ ・字が読めない ・言葉を聞いても分からない ・字が記号にしか見えない →　覚えることが難しい →　書くと覚えやすい	工夫した点は？ ・ジェスチャーや近くにあるものを利用した ・知っている言葉と結びつけた ・音節と文字の数で分析
外国人が近くに来たら、どのような配慮をしますか？ ・相手の身になって何がして欲しいか考える ・日本の言葉に合わせて母語も保障してあげたい ・身のまわりの物にローマ字をふる	

参加者からは、「初めて見る文字への抵抗感がよくわかった」「文字が読めない、書けない、聞けないことの不安を実践的に学ぶことができた」、学校現場の教員からは、「こうした状況に置かれた子どもたちへのサポートをもっと考えていかなくては」という声が聞かれました。また、参加していたブラジル人国際交流員からは、「外国人のために、様々な教材を作ってくれて、外国人が苦労していることを考えてくれて感謝します」と感想に書かれていたのが印象的でした。

第4分科会
タンザニアの子どもになりきってみよう！
～教師海外研修参加教員による実践授業報告～

■講師：足立　愛佳さん（有田川町立吉備中学校）
　　西堀　恵子さん（湖南市立水戸小学校）
■ファシリテーター：　大槻　一彦さん（国際教育研究会　Glocal net Shiga）
■参加者数：26名

（１）アイスブレーキング

①紙の上半分に「自分の呼ばれたい名前」、下半分に「タンザニアといえば？」について記載する。
②6～7人ずつの4グループをつくり、①の紙を使って自己紹介する。

（２）実践報告　西堀さん（約25分）

JICA主催の2010年タンザニア教師海外研修に参加した西堀さんが自身の学校で行った実践授業を報告。

＜教師が見たものと伝えたかったこと＞

異文化/ポレポレ（のんびり）文化、孤児院の子どもの笑顔
言葉だけではないコミュニケーション

＜授業の流れ＞

4月　世界がもし100人の村だったらワークショップ
8月　タンザニア教師海外研修
9月　タンザニアと友だち（日本との比較、ランキング、ちがいのちがいなどの実践）
10月　“カンガ”ファッションショー
11月　貿易ゲーム、無人島ゲーム、自分たちにできることを考えるブレインストーミング
12～3月　「スマイルプロジェクト」
・ベルマーク・プルトップ集め
・挨拶をする、トイレのスリッパを揃える
・セロハンテープの芯を集める
・ご飯お残しゼロ運動　　など

＜子どもたちの変化＞

タンザニアが大好きになった、「かわいそう」ではなく「みんな同じ」という意識を持つようになった

＜保護者から聞いた子どもたちの変化＞

世界に興味を持ち始めた、子ども同士が助け合って思いやる気持ちがうまれた。

（3）なりきりワーク　足立さん（約35分）

設定：タンザニアの中学1年生

① 1人ひとつずつ、“なりきりセット”封筒を受け取る。
（中身はまだ見ない）

② 講師が中学校の授業風にタンザニアの基本情報と様子を写真によって紹介。

③ “なりきりセット”封筒の外側に記載されている名前と年齢を確認して、自己紹介しながら同じ年齢の人たちで集まって床に座る。

④ それぞれの年齢を発表する。
⇒14歳～26歳まで幅広い　→タンザニアの中学校の留年制度の紹介

⑤ 同様に封筒の外側に記載されている宗教毎にまとまって床に座る。
→タンザニアにはキリスト教、イスラム教、伝統宗教があることの紹介

⑥ ムタマ中学校の生徒だけ椅子に座る。
⇒椅子に座れない人がいる
↳ 中学校に行ってない子どもを想定
→タンザニアでは中学校は義務教育ではなく、通っていない子どもがいることの紹介

＜通学しない理由＞

・学費が払えない
・進級テストに合格できなかった
・女の子だから
・16歳で妊娠したから
⇒椅子に座った人も人数分の椅子がなく2人で一つの椅子に座っている
→タンザニアの中学校では教室の椅子が足りていないことの紹介

⑦ 部屋の電気を消し、タンザニアでは教室に電気が無く、暗い部屋の中で授業が行われていることを体感する

⑧ “なりきりセット”封筒の中身を確認する
⇒ペン1本とノート1冊のみの人が大半で、教科書を持っている人は少ない
→タンザニアの中学校の生徒たちは教科書を共有していることの紹介

⑨ 英語による体験授業
⇒理解の程度を確認する
→タンザニアでは英語で授業が行われており、英語が分からないと授業が分からないことの紹介

⑩ 中学校に行っていない人たちの毎日の紹介
・レストランで労働
・農業/商売の手伝い
・洗濯や小さい子どもたちの世話

⑪ タンザニアの中学校には給食がない。その中で、軽食を買える設定の生徒には、飴を配る。
⇒みんなが買えるわけではないこと、そしてそれを分けあって食べていることの紹介

⑫　講師がタンザニアに訪問した際に撮影した中学校の様子を流す

⑬　質問「あなたは幸せですか？」

⇒全員「幸せ」という設定

→どんな時に幸せを感じるか、周りの人と話し合う

・お昼ご飯を分けてもらった時

・家族と過ごしている時

・学校にいる時　　など

⑭　講師がタンザニアに訪問した際に中学生にとったアンケート結果の紹介

⇒幸せを感じる時　第1位：勉強している時

第2位：サッカーをしている時

第3位：友達といる時

⑮　幸福度の国際比較（2000年）の紹介

⇒どんな状況でも幸せは存在する。幸せには何が必要か、考えながら生きてほしい。

⑯　このワークでよかった点・改善点を5～6人のグループを作って話し合う。

⑰　グループ毎に発表

・“なりきりセット”封筒の外側に記載されている個人データのカードをもっと分かりやすくした方がいい

・英語での体験授業を他の言語でできたらもっと授業が分からない感じがでていい

・日本人の幸せについても考える時間があっても良かったのではないか

・日本人の幸福度が低いのは何故か考える時間があってもよかった

・日本の中学生版で行ってもおもしろいと思う

・タンザニアの中学生という設定から始まったが、先に年齢別に分かれて、それぞれが何の集団か考えることから始めてもおもしろいと思う

参加者からは、「タンザニアの子どもたちが幸せということについて生徒たちと深く考えてみたい」「海外を取り上げるとき、まずその国を好きになることから始めるのがポイントだと気づかされました」といった声が寄せられました。